

ゼカリヤ書12-14章「エルサレムのために戦われる主」

1A 諸国の勢力 12

1B カづけられるユダヤ人 1-9

2B 恵みと哀願の霊 10-14

2A 御霊の清め 13

1B 偽預言者の除去 1-6

2B 残りの民の救い 7-9

3A メシヤ王国 14

1B 出てこられる主 1-5

2B 高められるエルサレム 6-11

3B 聖なるエルサレム 12-21

本文

ゼカリヤ書 12 章を開いてください。私たちはついに、ゼカリヤ書のクライマックスになる幻を読みます。ゼカリヤ書の主題は、「わたしは、エルサレムとシオンとを、ねたむほど愛した。(1:14)」というものです。主がご自分の愛されたもの、ご自分の選ばれたものを、神は決してお見捨てになりません。その愛は妬むほどであり、それを虐げる力があるならば、それを滅ぼしてしまわれます。キリストにあって、私たちは愛された者であり、選ばれた者です。それが、世界という大きな舞台を通して、エルサレムという、神に愛された都を通して展開されることを示しているのが、ゼカリヤの幻です。1 章から 6 章までが、八つの幻の中でそれが示され、7-8 章は単に形だけのエルサレムではなく、真実をもって平和の町になることを願っておられる神の心がありました。

そこで、主はご自分のもう一つ、私たちが知らなければいけないお働きがあります。神はご自分の愛する者から、汚れを取り除くということです。主は愛してやまないがゆえに、単にエルサレムが滅ぼされるのを救われるのではなく、それ以上に彼らが主に立ち返ること、主の聖い姿にあずかることを願っておられます。前回学んだ、9-11 章には主の宣告、あるいは重荷がありました。そこには、メシヤがエルサレムに柔和な姿で、雌ろばの子に乗って来られたところを読みました。私たちの罪を負われるために、へりくだった姿で来られたのです。そのへりくだりにこそ、将来、あらゆる権力を打ち滅ぼす力があるのです。クリスマスのメッセージもそうでした。飼い葉おけに寝かされていた赤ん坊のイエス様は、世界帝国ローマ皇帝アウグストよりも、力強かったのです。

そして、残念なことに、その選ばれたユダヤ人がそのことを知らずに、この方を受け入れなかったところも、前回の学びで見ました。羊を養い、食べさせなければいけない羊飼いが、かえって羊を売り買いついて食べてしまうという悲惨さ。それが、当時のイエス様が来られた時の姿でした。イエ

ス様は良き羊飼いなのですが、パリサイ人や律法学者、またサドカイ派の宗教指導者と対立しました。そして、なんと銀貨三十枚でイエス様の弟子イスカリオテのユダが、彼らに明け渡し、主は十字架に付けられることになるのです。まことのキリスト、まことの羊飼いを捨ててしまったので、自分の名でやって来る偽キリストを受け入れるようになる、愚かな羊飼いが来るのだというのが、11章に出てきたことでした。

主はそのために、彼らを取り扱われます。エルサレムに攻めて来る諸国の民を、ユダの民のために滅ぼしてください。しかし、その時に彼らは自分たちがキリストを突き刺したのだということに悟らせるようにされます。物理的に救うだけでなく、霊的に救ってくださるのです。そうして、神の国を、御国を天に御心がなされるごとく、地上にも行なってくださるのです。そして、私たちが今、生きている時代、その聖書のエルサレムが、まさに国際情勢の舞台に登場し、神さまの働きかけを見ることができる時代になっています。

1A 諸国の勢力 12

1B カづけられるユダヤ人 1-9

12:1 宣告。イスラエルについての主のことば。・・天を張り、地の基を定め、人の霊をその中に造られた方、主の御告げ。・・

宣告を行なうに当たって、神は、ご自分のことを「天を張り、地の基を定め、人の霊をその中に造られた方」と宣言しておられます。それは、エルサレムに関わるこれらの出来事が、全世界を取り巻くことになるからです。すべての民が注目するということでもあります。9章1節でも、「人の目は主に向けられている」と、イスラエルがギリシヤ王から守られることを人々が見つめることが書いてあります。エルサレムで何が起こるかということは、世界の日時計とユダヤ人が呼ばれるように、人々に対して神が時を教え、ご自分が生きていることを証している出来事なのです。

12:2 見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよろめかす杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲されるときに。12:3 その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれをかつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。

主は、エルサレムによって全ての国を裁くようにされます。「よろめかす杯」というのは、神の怒りの杯のことです。彼らが、神の裁きを被ってよろめくことを意味しています(黙示 14:10 等)。そして、すべての国々にとって「重い石」となります。つまり、国々はエルサレム問題を処理すべく、これを動かそうとするのです。しかし、重い石なので自分の足に落ちて、大きな傷を負います。若者が自分の力を自慢したいので、重い石を持ったところ、重すぎて自分の足の上に落としてしまいひどく傷つく様子を想像してください。

私たちは、この「国々が集まってくる」という動きを、聖書の中で、そして現代世界の中で見る事ができます。聖書の中では、いつもは敵同士の間々が、共通の敵を見つけることによって団結する様子が書かれています。ヨシュアがカナン人の地に入った時のことを思い出してください。「相集まり、一つになってヨシュアおよびイスラエルと戦おうとした。(9:2)」とあります。けれども、かえって彼らが一つになって戦うことによって、ヨシュア率いるイスラエル軍は、彼らを一気に滅ぼすことができました。これも神ご自身の主権の中にあつたことを、ヨシュア記 11 章 20 節がこう記しています。「彼らの心をかたくなにし、イスラエルを迎えて戦わせたのは、主から出たことであり、それは主が彼らを容赦なく聖絶するためであつた。」終わりの日に、エルサレムにすべての国々が集まるのも同じように、神が彼らのかたくなさを用いてご自分の栄光を現わすためです。

そして詩篇二篇には、彼らが相集まるのは、まさに神とキリストに対して反抗したいからだと言っています。「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。(1-2 節)」この箇所を引用して、初代教会の信徒たちは、ピラトとヘロデがいつしよになってイエス・キリストを十字架につけたことを祈りました(使徒 4:25-28)。事実、ルカによる福音書には、「この日、ヘロデとピラトは仲良くなった。それまでは互いに敵対していたのである。(23:12)」と書いてあります。黙示録 16 章には、世界の諸国がイスラエルのハルマゲドン、メギドの丘に集結することが預言されています。それが、神に対する戦いの備えであることが書かれています。

イスラエルが建国された時に、その独立宣言の日にアラブ主要国五か国が一気に新生イスラエルに攻めてきたと言う時から、この流れを見る事ができます。周辺国であれば、そのような紛争があつても、まあ仕方がないと見る事ができるかもしれませんが、なぜ世界のあらゆる国がイスラエルに反対する必要があるのでしょうか？

2016 UN RESOLUTIONS AGAINST...



Biased United Nations

国連という、様々な国が加盟している世界組織があります。そこは、人権の尊重を唱っている組織です。ところが、イスラエルへの非難決議を他の人権無視の国々にまさって例年行なっています。そして今年、イスラエルがエルサレムを自国の首都であるとしていることについて、米国がそれを認知する発表を出したら、それを非難する決議案が提出されました。圧倒的多数の国が賛成票を投じましたが、米国が拒否権を発動して、通過しませんでした。このように、エルサレムを何とか処理しようとする世界的な動きが

厳然としてあります。そして、これは主が確かに世界の中で動いておられることの証左なのです。

12:4 その日、主の御告げ。わたしは、すべての馬を打って驚かせ、その乗り手を打って狂わせる。しかし、わたしは、ユダの家の上に目を開き、国々の民のすべての馬を打って盲にする。
12:5 ユダの首長たちは心の中で言おう。エルサレムの住民の力は彼らの神、万軍の主にある、と。
12:6 その日、わたしは、ユダの首長たちを、たきぎの中にある火鉢のようにし、麦束の中にある燃えているたいまつのようにする。彼らは右も左も、回りのすべての国々の民を焼き尽くす。しかし、エルサレムは、エルサレムのもとの所にそのまま残る。

12章から14章には、「その日」という言葉が連発して出てきます。3節、4節、6節、8,9,12節、そして13章も1,2,4節、そして14章はこれが「主の日」と言明しています。終わりの日に、神がご自分の計画を完成される、定められた期間のことを指します。

ここで、「馬を驚かせて、乗り手を狂わせて、盲にする」という主の働きは、主がイスラエルの不従順に対して行なわれる呪いとして、申命記28章28節に書いてあります。しかし、今や主が、それをイスラエルの敵に対して行なわれます。ユダヤ人の力となっただけで、敵の目が見えなくなるとつれて、彼らの目が開かれていくようにされます。そして、彼らが次第に、主にこそ自分たちの力があると悟るようになるのです。馬ではなく、主ご自身なのだということは、ダビデがゴリヤテと対峙する時から何度も何度も、話していた事でした。「詩篇 20:7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。」

イスラエルの国は、今、イスラエル国防軍(IDF)があり、非常に優れた軍隊であると言われてます。百戦錬磨で、中東戦争を全て勝利に導きました。彼らの軍隊に対する信頼は絶大なものであり、国防意識はしっかりしています。しかし、そこには奇跡がなければ成り立ちませんでした。第一次中東戦争、独立戦争は、その独立宣言の日に、主要なアラブ諸国五カ国から一気に攻められました。どうして、勝つことができるのでしょうか？日本が、中国、北朝鮮、ロシア、あとどこでしょうか、その三つの国に一気に攻められて、しかも米軍に助けもないとしたらどうでしょうか？自衛隊だけで勝てるのでしょうか？彼らは、主権国でなかったのに、武器の供与をしてもらえませんでした。けれども、何とか工面して、密輸して、用意していましたが、勝利したのは奇跡でした。

もっと奇跡だったのは、六日戦争です。エジプト、シリア、そしてヨルダンがイスラエルを全滅させるために、用意していました。アメリカは、ベトナム戦争をしていたので、イスラエルを支援するとか、そんなことはありませんでした。しかし、たった六日でシナイ半島の全て、ガザ地区、西岸、ゴラン高原を全て取り、何よりもそこでエルサレムの旧市街を奪還、嘆きの壁で角笛を吹き鳴らしました。イスラエルが本当に全滅するのではないかとされていたところで、なんと領土が四倍にも広がったのです。



イスラエル人は、基本的に世俗派でした。しかし、少しずつ奇跡を体験しました。それで、神にしかこのことはできないとして、信仰が芽生えるようになりました。やはり、自分の力で、武力で勝ったのだという自負があるからです。しかし、まだそのように考えている人々は圧倒的に少ないです。終わりの日には、それが起こります。

12:7 主は初めに、ユダの天幕を救われる。それは、ダビデの家の栄えと、エルサレムの住民の栄えとが、ユダ以上に大きくなるためである。12:8 その日、主は、エルサレムの住民をかばわれる。その日、彼らのうちのよろめき倒れた者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになり、彼らの先頭に立つ主の使いのようになる。

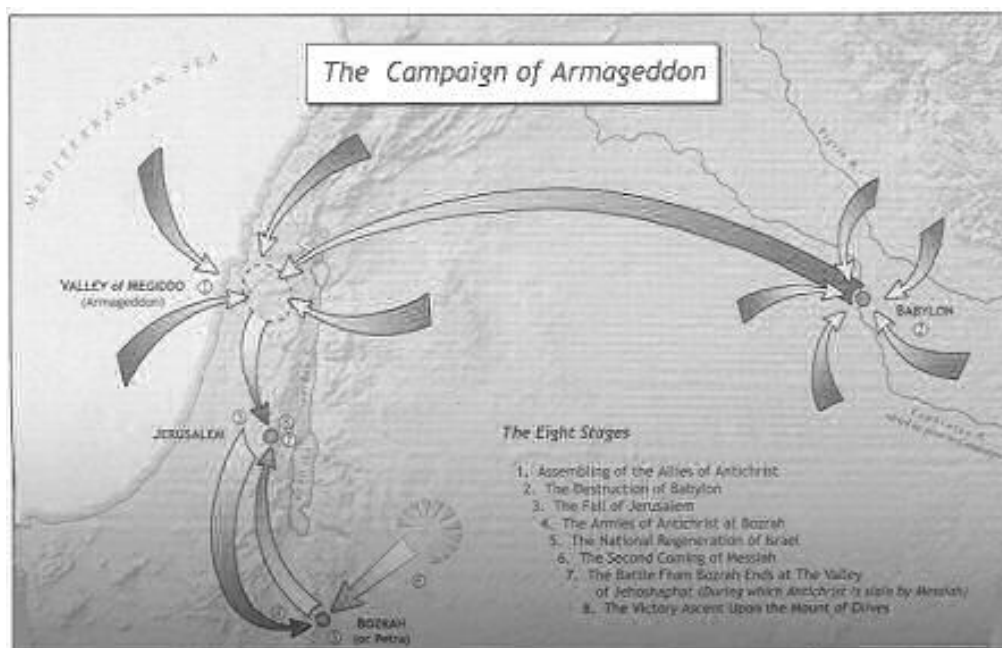
「ユダの天幕」というのは、エルサレム以外にいるユダヤ人たちのことです。まず彼らに勝利を与えられ、それから最後にエルサレムの住民を強められます。なぜかと言えば、エルサレムこそが主の最も大きな関心事であり、その救いをクライマックス、最後の完成にしたいからです。ちょうどそれは、出エジプトにおいて、ただエジプトから出て行くのではなく、紅海の岸辺までエジプト軍をおびき寄せ、それから主が一気にエジプト軍を水で滅ぼしたのと似ています。主の最後の救いがエルサレムになるために、まずはユダの天幕を救います。

そして、「ダビデの家」と呼ばずに「天幕」にいるということですが、彼らは自分の割り当て地にいらないことを示唆しています。終わりの日に、ダニエルの預言した七十週の最後の週があります。9章27節ですが、その週、七年の半ばに、荒らす憎むべき者が捧げ物やいけにえをやめさせます。何をするかと言えば、8章にあります。聖所の基をくつがえし、11章によれば、自分こそが神であるとします。イエス様がそれをマタイ24章で、弟子たちにこのように預言しました。「24:15-21 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難が



あるからです。」

イエス様は、エルサレムのオリーブ山におられます。そこはユダの山地です。ですから、「山へ逃げなさい」と言われるのですが、地図をご覧になれば分かります、山といっても、エルサレムから見ての山はエドムの地、死海の南になります。しかも、黙示録 12 章において、ユダヤ人が竜によって追われて、逃げる場所は「荒野」になっています。エドムの首都ボツラは、岩の山々です。そして、そこが今、世界遺産に定められているナバテア王国の首都「ペトラ」ではないかと言われています。そこは、岩に囲まれた盆地のようになっていて、入口は唯一、らくだやろばがかろうじて歩くことができるほどの、歩道しかありません。そこにユダヤ人たちは逃げます。「ミカ2:12 ヤコブよ。わたしはあなたをことごとく必ず集める。わたしはイスラエルの残りの者を必ず集める。わたしは彼らを、おりの中(ボツラ)の羊のように、牧場の中の群れのように一つに集める。こうして人々のざわめきが起ころう。」



ゼカリヤ書 14 章に、エルサレムが攻め込まれることが書かれていますが、半分だけは残ることが書かれています。他の人たちは逃げますが、このボツラに逃げます。けれども、反キリスト率いる軍隊は、彼らを追いかけます。その時に、シナイの方面、またパランの荒野の方面からイエス様が助けに来てくださいます(ハバクク 3 章)。イザヤ書には、主がボツラのほうで戦われて、その返り血によって衣が真っ赤になっている姿があります。「63:1-3「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」正義を語り、救うに力強い者、それがわたした。」「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それ

で、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。」そして、戦場はエルサレムに移るのです。

その間、戦いは続きますがエルサレムに諸国の軍隊が迫って来た時に、ここに書かれているように、エルサレムに残っていた住民が強められます。「よろめき倒れた者もダビデのようになり」というのは、ゴリヤテに対峙した少年ダビデのことを意識しています。住民のうちどんなに弱い者も、ゴリヤテを打ち殺したダビデのようになる、という約束です。そして、ダビデの家がエルサレムの中にいますが、彼らは、ヨシヤが約束の地に入った時に、先頭に立って戦ってくださった主の使いのように強くなります。私たちキリスト者もまた、主によって強められます。自分が強くなるのではなく、まさによろめき倒れているような自分でも、まるでゴリヤテを倒すかのように、主が倒して下さります。

2B 恵みと哀願の霊 10-14

12:9 その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

ここは、驚くべき預言です。イエス様が来られた時に、ご自分の民のために来られたのに、その民がこの方を受け入れませんでした。けれども、二度目に来られる時に、メシヤが自分たちが突き刺した者、イエスであることを知り、悔い改める、その御霊が注がれるということです。ローマ 11 章にあるように、「イスラエルはみな救われる」のです。

イエス様がユダヤ人の裁判のところにおられた時に大祭司が尋問しました。「マルコ 14:61-62 大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」そしてローマにイエス様を引き渡して、イエス様はここに書いてあるように、突き刺されるのです。「ヨハネ 19:34-37 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。それを目撃した者があかしをしているのである。そのあかしは真実である。その人が、あなたがたにも信じさせるために、真実を話すということをよく知っているのである。この事が起こったのは、「彼の骨は一つも砕かれない。」という聖書のことばが成就するためであった。また聖書の別のところには、「彼らは自分たちが突き刺した方を見る。」と言われているからである。」イエス様が戻られる時に、彼らは何千年もメシヤを待ち望んでいたのですから、それがまさかイエスであったとは、彼らはずっとメシヤを見失っていたことに驚愕し、嘆き悲しむのです。「黙示 1:7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」

使徒 7 章で、ステパノはユダヤ人議会で、旧約の預言者たちの歴史を述べました。そこにある法則は、「神が選ばれた者がイスラエル人に遣わされた時に、彼らはその預言者を認めないで、拒むが、後に認めるようになる。」というものです。ヨセフは兄の嫉妬を買い、兄たちはエジプトに売りましたが、ヨセフがエジプトの総理になったときに彼の前でひれ伏しました。モーセが 40 歳の時にイスラエル人の奴隷を救おうとしたのに、その時イスラエル人はモーセを認めませんでした。けれども 80 歳の時に戻ってきた時、彼らは認めました。同じように、イエス・キリストをあなたたちは拒んでいる、とユダヤ人議会でステパノは責めたのです。イエス様ご自身も、このことを宣言されました。「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。(マタイ 23:38-39)」

ここゼカリヤの預言には、「自分たちが突き刺した者、わたし」とヤハウェなる主が明確に、ご自分が突き刺されたことをお語りになっています。どうやって、神であられるヤハウェである方を、彼らが突き刺すことができるのでしょうか？この宣言を行なわれたのがイエス様です。主が、何度となく「わたしはある」と言われたのを思い出すことが出来るのでしょうか？ヨハネによる福音書の中で、「わたしは、世の光である」「わたしは、命のパンです」「わたしは、いのちです、よみがえりです」と言われましたが、はっきりと「アブラハムが生まれる前から、わたしはある(ヨハネ 8:58 参照)」と言われたのです。出エジプト記 3 章 14 節に出てくるヤハウェの名前、「わたしは、『わたしはある』というものである。」を宣言されたのです。

イスラエル人の問題は、その頑なさにあります。その頑なさというのは、自分で何とかするという頑なさ、律法の行ないによって義と認められるというところですが、日本の人たちにも共通の課題があります、どうしても、何もしなくても、主が一方向的に好意を持っておられて、祝福して下さるということを信じられないのです。「ローマ 9:31-32 しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」

ユダヤ人は優秀な民族です。何よりも、世界で最も迫害を受け、苦難を味わった民族なのに、その祖国から離散していたのに、それでも民族性を保ち、二千年近く生き延び、ついに自分たちの土地に戻り、国を作り上げたのですから。そして、今は技術開発に優れ、軍隊も持ち、外交もそれなりにしっかりと行ない、立派な先進国であります。ユダヤ人の行動形式の奥にあるのは何か？という問いに対して、ある聖書教師、彼もユダヤ人ですが、「生き残りだ」と言いました。民族を抹殺するとする国や勢力に囲まれているなかで、いかに生き延びるのかということをもとにして生きている人々です。しかし、その力こそが実は神の御手によって砕かれなければいけません。

ちょうどヤコブが、神の祝福を得るために太ももの関節を外されなければいけなかったように、

それでも初めてイスラエルとなったように、砕かれないといけないのです。「新共同訳 ダニエル 12:7 一時期、二時期、そして半時期たつて、聖なる民の力が全く打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する。」聖なる民の力が砕かれるために、大患難が与えられるということなのです。イスラエルの民が、もう力尽き果てて、自分の行ないではなく、神の恵みによって救われるために、自分の助けではなく、ただ神の憐れみに哀願する時に、その時に主が救ってくださいます。御霊を注いでくださいます。「エレミヤ 30:7 ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。」

12:11 その日、エルサレムでの嘆きは、メギドの平地のハダデ・リモンのための嘆きのように大きいであろう。12:12 この地はあの氏族もこの氏族もひとり嘆く。ダビデの家の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。ナタンの子の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。12:13 レビの家の氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。シムイの氏族はひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。12:14 残りのすべての氏族はあの氏族もこの氏族もひとり嘆き、その妻たちもひとり嘆く。

「メギドの平地のハダデ・リモンのための嘆き」というのは、ヨシヤの死のことです。ユダの王ヨシヤが宗教改革を敢行して、その後、カルケミシュに向かって北上していたエジプトのパロ、ネコがやって来たとき、メギドの戦いで死にました。その時にユダヤ全土が悲しみに包まれました。(2歴代誌 35:20-25)ハダデ・リモンはヨシヤが殺された場所です。

そして、ここに出てくる氏族は、徹底的です「あの氏族もこの氏族もひとり嘆く」というの、すべての氏族が悲しむことということです。イスラエルがみな悲しみ、そして救われるということです。代表的な氏族として「ダビデの家」が上がっています。次に「ナタンの氏族」とありますが、ダビデの息子のナタンのことを指しています(2サムエル 5:14)。マリヤはナタンの子孫です。ダビデの家の中で、小さな氏族にまでという意味合いがあります。いそれから、「レビの氏族」出てきて、「シムイの氏族」とは、レビの孫の氏族です(民数 3:17-18)。これも同じく、レビ族の中で、小さなシムイの氏族までということです。王族であるダビデの家系と、祭司職であるレビの家系が、いま一つになって嘆いていて、しかも、その隔々にまで嘆きが伝わる、つまり国民的悔い改めをします。また、王族と祭司が悔い改めるということは、次の御国における備えでもあるでしょう。彼らが、贖われたイスラエルにおいて仕えることになるからです(エレミヤ 33:17-22)。

2A 御霊の清め 13

1B 偽預言者の除去 1-6

13:1 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。

御霊の新生によって、彼らの罪と汚れが清められます。泉と書いてありますが、これは、ユダヤ

人にとって命の源を表しています、エレミヤが彼らの罪を指摘した時に、「2:13 わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。」と言いました。源は神ご自身であり、イエス様の流された血が良心をきよめ、また御霊が清めてくださいます。「神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。(テトス 3:5)」

イスラエルの民に、御霊の約束が与えられていました。それによって心が石から肉に代わるといふ約束があります。「エゼキエル 36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」このようにして御霊が注がれることによって、律法が心の中に書き記されると預言したのが、エレミヤです。「31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。…主の御告げ。…わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

13:2 その日、…万軍の主の御告げ。…わたしは、偶像の名をこの国から断ち滅ぼす。その名はもう覚えられない。わたしはまた、その預言者たちと汚れの霊をこの国から除く。13:3 なお預言する者があれば、彼を生んだ父と母とが彼に向かって言うであろう。「あなたは生きていてはならない。主の名を使ってうそを告げたから。」と。彼を生んだ父と母が、彼の預言しているときに、彼を刺し殺そう。

御霊の新生によって真理に目覚めた彼らは、今まで預言者だと思っていた者たちが、実は偽預言者だったことに気づきます。マタイ 24 章 24 節にも、「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」とあります。黙示録 13 章には、獣の国で、偽預言者がしるしを行なって、獣の像を拝むようにさせることが書かれています。「13:14-15 また、あの獣の前で行なうことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」

それで、たとえその偽預言者が自分たちの息子であっても、両親は息子を殺します。家族であっても、神に取って代えることはできないのです。ここは申命記にあるモーセの律法を意識したものだと思われます(13:6-9)。イエス様も、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。(マタイ 10:37)」と言われました。ですから終わりの時は、愛が試されます。偽預言者がは

びこります、偽教師がはびこります、教会の中から出てきます。「マタイ 24:11-13 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」耐え忍ぶ者は救われます。

13:4 その日、その預言者たちはみな、預言するときに見るその幻で恥を見よう。彼らはもう人を欺くための毛衣を着なくなる。13:5 また、彼は、「私は預言者ではない。私は土地を耕す者だ。若い時から土地を持っている。」と言う。13:6 だれかが彼に、「あなたの両腕の間にあるこの打ち傷は何か。」と聞いたら、彼は、「私の愛人の家で打たれた傷です。」と言おう。

新生したユダヤ人が、偽預言者を殺そうとしている時に、偽預言者は自分たちを救おうとして自分の身分を偽ります。「欺くための毛衣」とは、エリヤやバプテスマのヨハネのように、毛衣を着て預言者らしく振舞っていたのです。そして、ある者はただの農夫だ、土地を耕している、とごまかします。そしてある者は、「私の愛人の家で打たれた傷です。」と言います。自分の腕にある傷は、実はバアルの預言者のように、自分の身を傷つけて偶像の名を呼び求めていたから付いたものです。けれども「愛人の家」とありますが、これは「愛する者」と訳したほうがいいでしょう、父などの訓戒によって受けた傷だとごまかしているのです。

2B 残りの民の救い 7-9

しかし、偽預言者ならず、実は主ご自身が、良き羊飼いが受ける傷があります。次も驚くべき預言です。

13:7 剣よ。目をさましてわたしの牧者を攻め、わたしの仲間の者を攻めよ。・・万軍の主の御告げ。・・牧者を打ち殺せ。そうすれば、羊は散って行き、わたしは、この手を子どもたちに向ける。

11 章にて、ゼカリヤ自身が演じた良い羊飼いが、ユダヤ人指導者との確執の中で、銀貨三十枚によって売られたキリストを表していることを学びました。神はここで、この方を「わたしの牧者」そして「わたしの仲間の者」と呼ばれています。後者の「わたしの仲間の者」とは、ヘブル語によると神と同等の者という意味があるそうです。「わたしと父は一つです」と言われたイエス様の言葉と合致します。神ご自身、神と一つになっておられる方です。まさに人であられ、かつ神であられることがここにはっきりと出ています。

そして、この方が死なれたことを、神は積極的に、「剣よ。攻めよ。」と命じられていることに注目してください。キリストを殺されたのは誰でしょうか？かつて、ヨーロッパの歴史の中で、キリスト教徒はユダヤ人たちを見て、「キリスト殺し」と呼んで彼らを迫害しました。それに対抗してユダヤ人は、ローマがイエスを十字架につけたのだと反論します。そして、キリスト者は、「いや、私たちの罪がキリストを殺したのだ。」と言います。最後の、私たちの罪がキリストを殺した、というのが正し

いです。けれども、どちらも間違いです。キリストはご自分の命を自らお捨てになりました。イエス様は、「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。(ヨハネ 10:18)」と言われました。キリストは、自ら進んで、私たちのためにご自分の命を捨てられました。

そしてこの方がご自身をお与えになったのは、御心によったからです。神ご自身がこの方を打たれたのです。「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。(使徒 2:23)」神がこのことを計画し、予め知っておられたのです。神がそのように決められたから、その独り子イエス・キリストがご自分の命を自らお捧げになったのです。私たちは、ただ、この神の深遠なご計画と知恵の前で、ひれ伏すことしかできません！

そして、ユダヤ人がキリストを拒んだがゆえに、11 章でも学びましたが、羊は散っていきました。ローマによってエルサレムが破壊し、彼らは全土に離散したのです。

13:8 全地はこうなる。・・主の御告げ。・・その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。13:9 わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは「これはわたしの民。」と言い、彼らは「主は私の神。」と言う。

ユダヤ人の世界離散は今に至るまで続いています。シオニズムによって大量のイスラエル人が約束の地に戻ってきましたが、それでもまだ世界に散らばっています。その全地にいるユダヤ人に対する神の御告げがこの御言葉です。これは、受け入れがたい厳しい現実ですが、終わりの日にはホロコーストよりも多いユダヤ人が死ぬこととなります。「三分の二」が絶たれます。ホロコーストで死んだユダヤ人は六百万人でした。それが全人口の三分の一だったと言われていますが、今度は三分の二が死ぬのです。



ユダヤ人の迫害、反ユダヤ主義、その歴史を知ることはキリスト者にとっても必要な事でしょう。なぜ、そこまでされなければいけないのか？エジプトの時からそうでした。彼らが神に選ばれているがゆえに、パロは彼らを奴隷として酷使し、もっと強められ、増えて行ったので、ついにパロは、男の子をナイル川に投げ捨てろと言ったのです。この時に既にホロコーストの始まりが起こっていました。主がそこからの救いを、モーセを通して行われました。そして誕生したのが、イスラエルの民

です。イスラエルは、自分たちが滅ぼされる、殺されるというところを通過して、それで民族としてできています。エステル記にも、それが如実に表れました。モルデカイだけを憎めばよいのに、ハマンはユダヤ民族を抹消しようとしたのです。どうしてでしょう、なぜユダヤ人だけが標的にされるのでしょうか？神に選ばれた、愛された民だからです。そして、神に愛された者であるから、悪魔が何とかして滅ぼそうとするのです。黙示録 12 章に、反ユダヤ主義の黒幕が書かれています。「12:13 自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。」

しかし、それでも彼らがなおのこと、生き伸びて、その迫害によってイスラエル建国へ導かれたということを知る必要があります。これが信じられないことです。民族にとって最も悲惨な事が起こったので、かえって神の約束された地に集められたということです。エゼキエルは既にこのことを預言していました。「エゼキエル 20:33-34 わたしは生きている、..神である主の御告げ。..わたしは憤りを注ぎ、力強い手と伸ばした腕をもって、必ずあなたがたを治める。わたしは、力強い手と伸ばした腕、注ぎ出る憤りをもって、あなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集める。」東欧や西欧からのユダヤ人が、ホロコーストから免れるために一気に帰還しました。そしてイスラエルが建国されてから、独立戦争によって中東のアラブ諸国にいたユダヤ人たちがそこを追放され、難民となってイスラエルへと向かいました。

けれども、これは彼らが救われるために必要なことです。この大患難を通して、残された三分之一が神に立ち返ります。大患難は単なる災いではなく、ここにあるように銀を練るように、金を試すように彼らを清めるためのものなのです。そして救いを得ます。「わたしは「これはわたしの民。」と言い、彼らは「主は私の神。」と言う。」とありますが、これはエレミヤが預言した新しい契約によってもたらされるものです。「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。..主の御告げ。..わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。(31:33)」私たちは、個々の人生で、試練を受け、それで自分ではなく主に拠り頼み、御霊の新生を受けたことと思います。それが民族として、終わりの日に彼らは大きな試練の中からくぐるようにして、救われるのです。

3A メシヤ王国 14

こうして主が、諸国の軍隊が攻めて来るけれども彼らに戦い、その間にエルサレムの住民に御霊が注がれ、彼らが悔い改め、罪が取り除かれます。そして、再び主が戻って来られるところに戻りますが、次は主が地上に立ち、そしてエルサレムから世界を治められる、御国、メシヤの王国の幻を見ます。

1B 出てこられる主 1-5

14:1 見よ。主の日が来る。その日、あなたから分捕った物が、あなたの中で分けられる。14:2 わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。町は取られ、家々は略奪され、婦女は

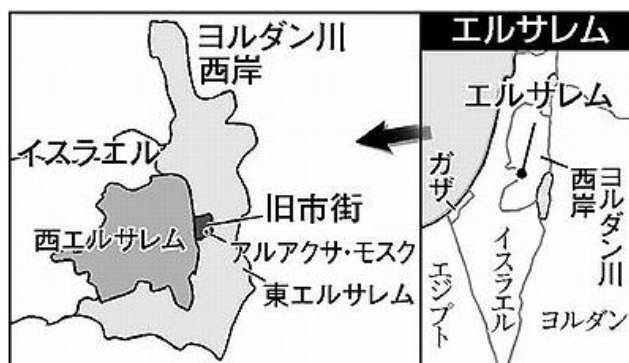
犯される。町の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は町から断ち滅ぼされない。



再び、主が来られる前のエルサレムの状態に戻っています。先に説明したように、エルサレムはハルマゲドンの戦いの初期の段階で、半分に破壊されます。けれども、神は残りの民をここに置いてくださいます。そして後に、彼ら自身もすべての国々の軍隊によって攻撃を受けて、絶体絶命になった時に、主がご介入されます。その前半で、エルサレムの半分が分割されるという預言がここにあります。ヨエル書にも、エルサレムの町ではないですが、イスラエルの土地自体が、分割される、分け取られる話を書いてあります。「彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。(3:2)」

エルサレムという町、またイスラエルの地は、実に不

思議です。どうして、こうも国際社会は分割したがるのでしょうか？イスラエルの地図は、1947年、国連による分割案です。黄色がユダヤ人主権の国、斜線がアラブ人主権の国ということでした。ユダヤ側は飲んだのですが、アラブ側が拒否、それで独立宣言の日にアラブ諸国が戦争を始めました。そこで、ヨルダンと戦った時に、エルサレムは分割されました。新市街とも呼ばれる、西エルサレムと、旧市街を含んだ東エルサレムです。旧市街は西壁沿いに休戦ラインが敷かれ、旧市街はヨルダンの占領となりました。そこを六日戦争で、イスラエルが奪還しました。そして、イスラエルは、エルサレムは永遠の、不可分の都市であるとして、東エルサレムを併合しました。しかし、それが国際的に認められず、多くの大使館がエルサレムではなく、テルアビブにあるということです。そして終わりの日には、半分が取られるというのです。



14:3 主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。14:4 その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。14:5 山々の谷がアツアルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。ユダの王ウジヤの時、地震を避けて逃げたように、あなたがたは逃げよう。私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。

主が戻って来られます。国々と戦われます。その様子は、ヨエル書で鮮やかに幻の中に出ていました。「ヨエル 3:9-15 諸国の民の間で、こう叫べ。聖戦をふれよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。あなたがたの鋤を剣に、あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。弱い者に「私は勇士だ。」と言わせよ。回りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。..主よ。あなたの勇士たちを下してください。..諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。」ここの、ヨシャパテの谷が、オリーブ山と神殿の丘の間のケデロンの谷の部分の指していますが、そこで主が彼らをことごとく裁かれます。

主はまずボツラに向かわれます(イザヤ 63:1-6)。それから戦いがエルサレムに移り、主が完全に世界の軍隊を滅ぼされて、最後にオリーブ山に立たれます。そしてその一帯の地殻が大変動するのです。



「オリーブ山」に、なぜ主が戻って来られるのでしょうか？それは、神の栄光をエルサレムに戻すためです。エゼキエル書で私たちは学びました。神殿の中で汚れたこと、忌み嫌うべきことを彼らが行っていたために、主の栄光が少しずつ神殿から離れ、東の門を通り抜けて、そして最後は東の山にとどまります。「主の栄光はその町の真中から上って、町の東にある山の上にとどまった。(エゼキエル 11:23)」そして栄光がエルサレムから離れました。エゼキエル書 43 章には、この栄光が東の門から再び戻ってきて、聖所の中に入るのを見ることができます(1-5 節)。したがって

イエス様がなぜ、オリーブ山から昇天されたのかも理解できます。残された弟子たちに対して、二人の天使が「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。(使徒 1:11)」イエス様をメシヤとして受け入れるのを拒んだユダヤ人は、再び神の栄光がオリーブ山から離れたことを経験したのです。

それで主がオリーブ山に戻って来られます。その時、地殻大変動が起こります。オリーブ山は、南北に走る山です。その真ん中が分かれて、東西に広がる谷ができます。そして最終的に、ユダの相続地全体が低地となって、エルサレムの所だけが高くなっている地形になります(10 節)。この地形変動が起こる前に、エルサレムの住民は新しくできた谷を通して、エルサレムから逃げます。そして新しくできあがったエルサレムに戻ってくるのです。ウジヤの時代の地震は、列王記や歴代誌には記録されていませんが、アモス書に言及されています(1:1)。

そして主が来られる時に、「すべての聖徒たちも主とともに来る」とあるのに注目してください。すでに聖徒たちは、主が地上に再臨される時に主と共にいるのです。地上再臨と、空中で信者が主とお会いする携挙を同じだと考える人たちは、この箇所をどのように解釈しているのか理解できません。空中に引き上げられ、そこでお会いして、そして一緒に地上に戻ってくるのでしょうか？では、黙示録 19 章にある小羊の婚宴はいつ行なわれるのでしょうか？黙示録 19 章を開いてください。7,8 節を読みます、「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」そして、14 節をご覧ください。「天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。(黙示 19:14)」この白い麻布を着ている人々は、天にいる聖徒たちです。そして彼らは教会です(黙示 3:4)。

2B 高められるエルサレム 6-11

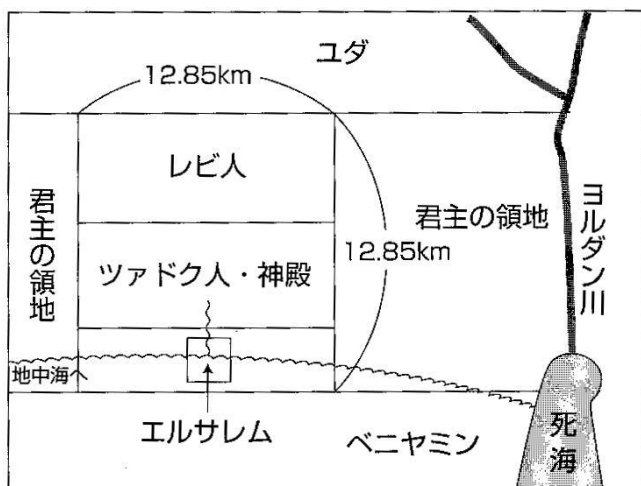
そして 6 節から、主がエルサレムに王座に着座される、御国の情景です。

14:6 その日には、光も、寒さも、霜もなくなる。14:7 これはただ一つの日であって、これは主に知られている。昼も夜もない。夕暮れ時に、光がある。

ここからは、主が地上に神の国を立てられた千年の間の情景です。千年王国が、実は、イエス様が祈りなさいと命じられた祈りの中に含まれています。「御国が来ますように。みこころが天に行なわれるように地でも行なわれますように。(マタイ 6:10)」その国では光がものすごく輝いています。イザヤは、同じことをこう表現しています。「主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日に、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍になって、七つの日の光のようになる。(30:26)」

14:8 その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、その半分は東の海に、他の半分は西の海に流れ、夏にも冬にも、それは流れる。14:9 主は地のすべての王となられる。その日には、主はただひとり、御名もただ一つとなる。14:10 全土はゲバからエルサレムの南リモンまで、アラバのように変わる。エルサレムは高められ、もとの所にあつて、ベニヤミンの門から第一の門まで、隅の門まで、またハナヌエルのやぐらから王の酒ぶねのところまで、そのまま残る。14:11 そこには人々が住み、もはや絶滅されることはなく、エルサレムは安らかに住む。

エルサレムが中心となりますが、その前に、9 節「主は地上のすべての王となられる。」に注目しましょう。今は、キリストを自分の心にお迎えした人たちにとっては、この方が主ですが、すべてのものがこの方に服従しているのを私たちはまだ見ません。けれども、その時がいずれ来ます。黙示録でも、天において天使らがこう叫んでいます。「この世の国(々)は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。(11:15)」



そしてエルサレムですが、その地形は先ほど読みましたように、オリーブ山は大きく東西に分かれて谷が出来ています。エゼキエル書 40 章には、東の死海に流れる川が神殿から流れ、その水によって死海に魚が生きようになる幻が記されていますが、ここゼカリヤ書では西の海、すなわち地中海にも川が流れていることが分かります。

そして先に話したように、エルサレムは高い所にとどまってユダの相続地全体がアラバのようになるとあります。アラバは、ヨルダン川と死海、そして紅海に至るまで続いている非常に低い所、溪谷のことです。実に多くの部分が水面下になっています。したがって、エルサレムの町が非常に高くなるのですが、それはイザヤ書またミカ書に預言されていることです。「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。(ミカ 4:1-2)」

そして、「ベニヤミンの門から第一の門まで、隅の門まで、またハナヌエルのやぐらから王の酒ぶねのところまで、そのまま残る。」とありますが、これらは北壁のところにある門です。いつも、攻められる時はここから侵入されました。東はケデロンの谷、南と西はヒノムの谷、そして真ん中にチロペオンの谷がありますが、唯一、北だけが脆弱だったのです。

そしてエルサレムの住民が最も望んでいること、「安らぎ」が与えられる約束がここにあります。これを聞いているのは、バビロンからの帰還民であることを思い出してください。彼らの現実、ここに書かれてある姿とは程遠いものでしたが、けれども信仰を持っている者たちはこの幻を掲げて、勇気をもって生きていたはずで、私たちも同じではないでしょうか？信仰によって見る御国の幻があるからこそ、今の厳しい現実の生活を生き抜くことができるのではないのでしょうか？

3B 聖なるエルサレム 12-21

14:12 主は、エルサレムを攻めに来るすべての国々の民にこの災害を加えられる。彼らの肉をまだ足で立っているうちに腐らせる。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。14:13 その日、主は、彼らの間に大恐慌を起こさせる。彼らは互いに手でつかみ合い、互いになぐりかかる。14:14 ユダもエルサレムに戦いをしかけ、回りのすべての国々の財宝は、金、銀、衣服など非常に多く集められる。14:15 馬、騾馬、らくだ、ろば、彼らの宿営にいるすべての家畜のこうむる災害は、先の災害と同じである。

再び、国々の民がエルサレムを攻めてくる場面に戻っています。主が彼らと戦われるのですが、その勢いがものすごいですね。まだ足で立っているうちに彼らは腐ります。目がまぶたの中で鎖、舌が口の中で腐ります。まるで原爆の放射能を一気に浴びているかのような光景です。そして、彼らは互いに殴りあいます。これは、イスラエルの戦争の中で数多く見てきたものです。ミデヤン人が、三百人のギデオンの軍隊に恐れをなし、互いに戦っていました。そして先に見てきたように、エルサレムのために主が戦われたことによって倒れた国々の軍隊を、エルサレムにいない周りのユダヤ人が止めを刺します。戦うというよりも、ここを見ると略奪するといったほうが良いでしょう。

14:16 エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。14:17 地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムへ上って来ない氏族の上には、雨が降らない。14:18 もし、エジプトの氏族が上って来ないなら、雨は彼らの上に降らず、仮庵の祭りを祝いの上って来ない諸国の民を主が打つその災害が彼らに下る。14:19 これが、エジプトへの刑罰となり、仮庵の祭りを祝いの上って来ないすべての国々への刑罰となる。

千年王国には、大患難を通り抜けた人々がいます。マタイ 26 章を見ると、生き残った国々の民のうち、これら小さな者たちにしたものはわたしにしたのです、とイエス様が言われて御国に招かれる者もいれば、そうではなく地獄に投げ込まれる者もいます。こうして御国に招かれた者たちが、エルサレムにおられる王なるキリストを礼拝します。

「仮庵の祭り」と具体的に書いてあります。これは元々、イスラエルの民が神に守られて荒野の旅を行なうことができたこと、そして無事に約束の地に入ることができたことを祝う祭りですが、終

末には意味が異なります。神の国の至福を喜ぶ祭りになります。レビ記 23 章には、一年に行なう祭り、つまり例祭において、七つを守りなさいと主が命じられました。過越の祭り、種なしパンの祝い、初穂の祭り、五旬節、ラッパを吹き鳴らす日、贖罪日、そして仮庵の祭りです。そのうち春の祭りは初めの四つ、秋の祭りは残りの三つです。それぞれに、キリストの御業の預言があります。過越の祭りはキリストの十字架を、種なしパンの祝いは十字架の御業による罪の除去を、そして初穂の祭りはキリストの復活を表します。そして五旬節は聖霊降臨を表します。そして長い間隔を置いて秋の祭りがありますが、ラッパを吹き鳴らす日は携挙を表します。贖罪日はキリストの再臨を、そして仮庵の祭りが千年王国です。春と秋の祭りがそれぞれ間隔が空いているように、キリストの初臨と再臨も間隔が空いていますが、私たちはまさにその間に生きているのです。



そして、仮庵の祭りに参加する異邦人の国々の代表的例としてエジプトが挙げられています。エジプトは、終わりの日に回心する国としてイザヤ書 19 章 16 節以降に書いてあります。けれども、彼らがエルサレムに上っていない可能性が書いてあります。このように、千年王国にはまだ罪が存在することを見ることができます。黙示録 19 章に、キリストが「鉄の杖」をもって国々を牧されることが預言されています。羊飼いは木の杖ですが、千年

王国では鉄の杖なのです。これは、少しでも悪を行なえば速やかに罰せられ、その悪が他に広がっていくことのない正義を表しています。今、私たちは恵みの時代に生きています。だから悪を行なう者にも善を行なう者にも、太陽が同じように輝き同じ恩恵を受けていますが、その分、悪もはびこっているのです。千年王国では、悪魔が底知れぬ所で縛られていますから、誘惑が極端に減っていますが、それでもアダムから受け継いだ肉体のまま御国に入ってきた人たちがいるわけで、その子孫は罪を犯しえるのです。

14:20 その日、馬の鈴の上には、「主への聖なるもの」と刻まれ、主の宮の中のなべは、祭壇の前の鉢のようになる。14:21 エルサレムとユダのすべてのなべは、万軍の主への聖なるものとなる。いけにえをささげる者はみな来て、その中から取り、それで煮るようになる。その日、万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる。

主の御名が一つになるのは、王権だけではありません。現在は御霊によって、聖なる者とされた者たちがいる一方でその教会から離れれば、外は世俗の空間です。けれども、終わりの日には聖

なるもの、俗なるものの区別がなくなります。すべてが神殿の敷地内にいるように、聖なるものとなります。「馬」は戦争に使われる動物ですが、それが大祭司のかぶるターバンにつける「主への聖なるもの」が刻まれます。また外庭で使われる鍋は、内庭の祭壇にある鉢のようになります。ゼカリヤは続けて鍋に注目していますが、エルサレムとユダのすべての鍋は、主への聖なるもの、つまり神殿奉仕に用いられるものになります。俗なるものがなくなるのです。

それで「商人がいなくなる」と書いてあるのです。イエス様がなぜ、宮清めをされたかがここから分かりますね。安息日の律法も、商売をすることがないように荷物を運んではならないという戒めがありました。今のエルサレムは、到底、聖なるものとなっているとは言えません。商売人の騒がしさ、また聖墳墓教会などと呼ばれているところで、あまりもの混雑と教派間の争いで気が滅入りそうです。



www.alamy.com - AX084P

私たちは、この地上において、最大限、聖なるものとして主に捧げていくことを命じられています。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。(1コリント 10:31)」私たちの、神から与えられた使命は大きいですね。けれども、使命が大きい分、その特権も大きいです。